



チョーサーを愛した古英語写本のコレクター達 : 16～18世紀における『カンタベリー物語』写本の意義

著者	和田 葉子
雑誌名	関西大学東西学術研究所紀要
巻	25
ページ	A1-A16
発行年	1992-03-31
その他のタイトル	Early Modern Collectors of Anglo-Saxon Manuscripts Who Loved Chaucer
URL	http://hdl.handle.net/10112/15940

チ ョ ー サー を 愛 した 古 英 語 写 本 の コ レ ク タ ー 達

—16～18世紀における『カンタベリー物語』写本の意義—

和 田 葉 子

16-18世紀にかけて、古英語を含む写本の主な所有者のうち、その3分の1近くが *The Canterbury Tales* の写本を手に入れていた。¹⁾

例えば、*Ancrene Riwe* のフランス語版 Cambridge, Trinity College, MS. R. 14. 7 (883) を所有していた George Willmer (d. 1626)²⁾ は古英語の写本を2冊持っていただけでなく、フランス語の love lyrics を収めた、Cambridge, Trinity College, MS. R. 3. 20 (600), Roger Thorney (d. 1515) が作らせた豪華な写本、同じく R. 3. 21 (601)⁴⁾ を所有し、やはり彼のものであった MS. R. 3. 19 (599) は、おそらく John Stow から手に入れた Chaucer, Lydgate などの詩も数多く含む *The Canterbury Tales* を収めた写本⁵⁾であった。

1536年に始められた修道院の解体は、そこに収められた莫大な数の貴重な写本が散逸する結果をもたらした。それをくい止めようとする努力は、宗教改革という社会の動きの中で、主に Anglo-Saxon 時代の法令や教会史の資料になる写本を中心に行われた。⁶⁾ 従って、修道院解体後の16世紀後半は特に、古英語で書かれた写本と中英語の写本では、それらの利用・収集目的が異なっていたと考えられる。⁷⁾

本論では、本来、歴史的研究の文献資料として入手されたと考えられる古英語写本と、*The Canterbury Tales* という、まったく性質の異なる中英語による文学作品を収録した写本の両者を同時に所有した主な人物について、16世紀から18世紀まで、各世紀別に順を追って考察することにより、当時のコレクターの、英語で書かれた写本の収集目的や興味のあり方を探る。

(1) 16 世 紀

1. John Lumley (1534?-1609), Baron Lumley

彼はエリザベス朝最大の個人蔵書家と言われ、13もの古英語を含む写本を所有していたことが知られている。⁸⁾ Lumley の持っていた *The Canterbury Tales* の写本は、ぶ厚い vellum に彩飾をほどこした London, British Library, MS. Royal 18. C. ii [Ry²] であった。彼が亡くな

るとその蔵書は King James に買い取られ Royal Library の一部となった。⁹⁾

2. John Parker (1548-1618)

彼は Archbishop Parker の息子である。豪華な Homilies を含む¹⁰⁾古英語の写本を所有していた。¹¹⁾父親から *The Canterbury Tales* その他を含む、紙の写本 Cambridge, Trinity College, MS. R. 3. 15 (595) [Tc²] を譲り受ける。これには、Matthew Parker の circle で使われていた、有名な赤いクレヨンの pagination が見られる。また、16世紀に付け加えたと思われる ff. 307-318 'Piers Plowman's Crede' には 'TW' のイニシャルがあり、¹²⁾おそらく、Archbishop Parker の身近にいた John Twyne (1501?-1581) あるいは Thomas Wotton (1521-1587) のものであると推測される。¹³⁾この写本は Parker Library に収められなかったため、後述するように、John を通じて、Ker no. 88 と同じように、Trinity College, Cambridge の master であった Thomas Neville (d. 1615) に渡ったと思われる。¹⁴⁾

3. Matthew Parker (1504-75), Archbishop of Canterbury

修道院解体後、patron として、写本の救出に尽力した Matthew Parker の目的は、Church of England の権威を裏付ける古英語で書かれた文献を集めることであった。その結果、57もの重要な古英語写本が彼の所有するところとなり、現在、世界で最も多く古英語の写本を有する図書館が Parker Library である。¹⁵⁾しかし、彼の関心はそれだけではなかった。彼のもとに集められた450以上の写本は、聖者伝、天文学、音楽、数学、錬金術、哲学、政治学、フランス語のロマンス、動物寓話集、ホメロス、エウリピデス、キケロ、セネカ、ラングランド、ウィクリフ、というように幅広い分野を網羅している。¹⁶⁾Parker は上述したように Tc² を結局、手放しているが、美しい frontispiece で有名な *Troilus* の写本 Corpus Christi College MS. 61 は今も、その図書館に保存されている。

4. Francis Russell (1527?-1585), Second Earl of Bedford

彼は、Homilies の2つの古英語を含む写本を所有していた。¹⁷⁾Manly-Rickert は彼の持っていた 'An old boke of Chawcer in parchment written hande' が Oxford, Bodleian Library, MS. Laud misc. 739 (S. C. 1234) (*olim* Laud G 69) Ld² であったかもしれないと推測している。

5. Sir Henry Savile (1549-1622), Provost of Eton and scholar

彼は、古英語のグロスの付いた Bede の写本を所有していた。¹⁹⁾ヨーロッパ大陸の各地を旅行し、熱心に写本を収集していた。Tacitus の翻訳もしている。Bodley の親友であり、'the most learned Englishman in profane literature of the reign of Elizabeth'²⁰⁾と呼ばれた。

彼と Sir John Savile, Baron of the Exchequer および Sir John Savile, Jr. によって集

められた蔵書の中に *The Canterbury Tales* の写本, 現在の San Marino (Cal.), Huntington Library, MS. HM 144 (*olim* Huth 7) [Hn] があったことが, 1861年の sales catalogue の記述から知られる。²¹⁾ この paper の写本には彩飾がまったくなく, Lydgate とその他多くの宗教的作品を集めた様々な大きさの quires から成る。

6. Sir Henry Spelman (1564?-1641), historian, antiquary, country gentleman

古英語のグロス付の Psalter と canticles の写本を所有していた Spelman は発足当時の Society of Antiquaries のメンバーであった。²²⁾ 当時のその会員に特徴的であったように, 彼も紋章やコインに興味を持っていた。Spelman が何より関心を示したのは英国の法律の歴史であった。Cambridge に Anglo-Saxon lectureship を設けたのは彼である。

Spelman は vellum に彩飾をほどこした *olim* Chatsworth House (Derbyshire), the Duke of Devonshire, MS. [now in a private collection in Japan] [Ds] を持っていた。²³⁾ また, 彼は vellum と paper の ‘Piers Ploughman’s Vision, Maundevely, Storie of Susanne and Daniel, Joseph, Troylus in 5 books, Lucifer to all our dere felawes’ を含む写本も所有していたと思われる。²⁴⁾

(2) 17 世紀

1. John Bagford (1650-1716), shoe-maker and biblioclast

Bagford は ‘biblioclast’ (本の破壊魔) と称されたように, 多くの写本と印刷本のページを切り取っていた。というのは, 彼は, それらを, 出版計画を立てていた印刷の歴史の本に使う見本にしようとしたからであった。²⁵⁾ したがって, 彼の所有していた古英語の写本は3種とも fragment で, 見本用に切り抜かれたものか, あるいは最近の見方では, 彼が見つけた fragment をコレクションの中に入れ保存したものである。²⁶⁾

彼が持っていたと思われる *The Canterbury Tales* の写本 London, British Library, MS. Harley 5908 [H1⁴] もぶ厚い vellum の一枚である。彼の死後, おそらく後述する Robert Harley, Earl of Oxford の息子 Edward, second Earl of Oxford に買い取られたと思われる。²⁷⁾ Bagford は Pepys, the Harleys, Sloane, Moore ら, 当時最も重要だとみなされるコレクターのために書籍購入の仲介をしていた。²⁸⁾

2. Willam Fulman (1632-1688), antiquary

彼は英国の歴史と古事研究に造詣が深かった。彼の持っていた古英語の写本にはラテン語と古英語による Rule of St. Benedict と Bury St. Edmunds に関する文書が含まれている。²⁹⁾

彼の所有した Oxford, Corpus Christi College, MS. 198 [Cp] は上質の vellum に彩飾

をほどこした *The Canterbury Tales* の写本である。

3. Robert Harley (1661-1724), first Earl of Oxford, speaker of the Parliament and chancellor of exchequer

Harley は文学をこよなく愛する大蔵書家であった。1721年には6000冊を所有したと言われ³⁰⁾る。古英語の写本も19に及ぶ。*The Canterbury Tales* の写本については、London, British Library, MSS. Harley 1239 [Ha¹] (vellum, Troilus を含む), Harley 1704 [H1¹] (vellum 及び paper, 多くの詩収録), Harley 1758 [Ha²] (vellum, 彩飾入り), Harley 2251 [H1²] (paper, 133もの詩を含む), Harley 2382 [H1³] (paper, 多くの詩収録) を持っていたと思われ³¹⁾る。その蔵書は息子の Edward によって、さらに増大する。

4. Sir Christopher Hatton (1632-1706), first Viscount Hatton

3冊の古英語による Homilies の写本を所有していた³²⁾。1675年, Bodleian Library に、これらとともに、貴重な写本を寄贈した³³⁾。

彼が持っていたと思われる *The Canterbury Tales* の写本 Oxford, Bodleian Library, MS. Hatton Donat. I S. C. 4138) [Ht] は、上質の vellum 製で、彩飾がほどこされ、詳しいグロスが付いている。彼は Pepys のために本を買い求めたりしていたことが知られて³⁴⁾いる。

5. Thomas Howard (1585-1646), Earl of Arundel, art collector

彼は、Psalter と canticles を含む美しい写本の他2つの古英語の写本を所有していた³⁵⁾。仮面劇や馬上槍試合で派手に活躍、礼儀作法を愛し、外国人好みで、広く芸術や学問のパトロンとして有名だった。Howard の芸術作品のコレクションは英国最初の試みであったと言われて³⁶⁾いる。Cotton, Spelman, Camden, Selden と親交があった。

彼の *The Canterbury Tales* の写本は London, British Library, MS. Arundel 140 [Ar], 紙製で字体もあまり美しくないが、*Melibeus* の他、*Ypotys*, *Sir John Mandeville's Travels*, *The Pryke of Conscience*, *Speculum Gy of Werwyke*, *The Seven Sages* を収めた当時よく読まれた作品集となっている。

6. William Howard (1563-1640), Lord William of Naworth, scholar and antiquary

彼は3つの古英語の写本を持っていた³⁷⁾。Florence of Worcester の *Chronicon ex Chronicis, auctore Florentio Wigorniensis Monacho* の edition を出版し、Lord Burghley に捧げている。Naworth に大きな図書館を持っていた。Cotton, Camden, Spelman などと親交があった。Ussher は Howard の所有していた Aldhelm の写本を校訂している³⁸⁾。

Oxford, Bodleian Library, MS. Rawlinson c. 86 (S. C. 11951) [Ra⁴] は彼が持っていたと思われる *The Canterbury Tales* の写本である。ほとんどが紙から成る35のアンソロジー

である。その中には、誤って Lydgate 作とされている ‘Complaint of Dido’ (*The Legend of Good Women*) が収められている。F. 30 に記されている彼の名前は黒く塗りつぶされている。³⁹⁾

7. William Laud (1573-1645), Archbishop of Canterbury and Chancellor of Oxford University

彼は年代記を含む6つの古英語の写本を持っていた。⁴⁰⁾ Laud の所有していた *The Canterbury Tales* の2冊の写本は、いずれも羊皮紙の Oxford, Bodleian Library, MS. Laud misc. 600 (S. C. 1476) (*olim* Laud K 50) [Ld¹] と MS. Laud misc. 739 (S. C. 1234) (*olim* Laud G 69) [Ld²] である。Ld¹ には美しい彩飾がある。この写本に記された献辞から1635年 Laud が John Barkham (? 1572-1642) から譲り受けたことがわかる。Barkham は聖職者、歴史家、古美術愛好家、紋章官でもあり、Bancroft と Abbott の二人の Archbishop of Canterbury の chaplain をも勤めた人物であった。⁴¹⁾ Ld² の f.1 には、1633という年号と、彼の名前が Archbishop of Canterbury, Chancellor of Oxford の肩書と共に、書かれている。この写本は Bishop of Durham, John Cosin の妻の父親である Marmaduke Blakston (1563-between 1633 and 1642) のものであったらしいが、⁴²⁾ それがどのような経路で Laud の手に入ったのかはわかっていない。

8. John Maitland (1616-1682), Duke of Landerdale

美しい古英語の *Orosius* の写本の所有者であった彼はまた、⁴³⁾ 豪華な彩飾入りの *The Canterbury Tales* の写本も持っていた。⁴⁴⁾ これは Oxford, Bodleian Library, MS. Rawlinson F. 223 (S. C. 14714) (*olim* Rawl. Intermediate list 1133) [Ra³] である可能性がある。⁴⁵⁾ 上質の羊皮紙が使われており、Lydgate の Troy Book の fragment が最初に挟まれている。

9. John Moore (1646-1714), Bishop of Norwich and Ely

多くの説教の著者であり蔵書家として有名であった。Moore は、英国における black letter collectors の父と呼ばれ、彼が亡くなる時には29,000の印刷本と1,790の写本が手元にあったと言われている。Bagford が彼の収集を熱心に助けていた。Moore は他の古書愛好家から、その蔵書の集め方について、良からぬ噂を随分たてられていたようである。ともあれ、Moore は Bagford の尽力に対して、老後は London の Carthusian monastery の跡に建てられた the Charterhouse 養老院に住まわせてやったということである。⁴⁶⁾ 彼のコレクションは George I に買い取られ、やがて1715年 Cambridge University Library に入った。

Moore は古英語の詩や prayers など3つの写本を所有していた。⁴⁷⁾ *The Canterbury Tales* の写本も3つ手に入れている。それらは、彩飾をほどこした分厚い羊皮紙の Cambridge,

University Library, MS. Mm. 2. 5 (2300) (*olim* 'the Ely MS.')[Mm], 羊皮紙とペーパーからなる MS. Dd. 4. 24 (199) (*olim* Hodley) [Dd], 紙に派手な装飾入りで, Lydgate などを含む7作品を収めた, MS. Ee. 2. 15 (933) [Ee] である。⁴⁸⁾

10. Thomas Nevile (d. 1615), Vice-chancellor of Cambridge, Master of Trinity, Dean of Canterbury

Annals of St Neots や Psalter などを含む古英語が書かれた写本3冊を所有していた。⁴⁹⁾ このうち, Bede's Death-song を収めた Cambridge, MS. Trinity College R. 7. 28 (770) は John Parker の蔵書であったことがわかっている。⁵⁰⁾ 先にも述べた通り, John Parker の持っていた *The Canterbury Tales* の写本 Cambridge, Trinity College, MS. R. 3. 15 (595) [Tc²] も Thomas Nevile の手に入っている。Nevile はこれらを Trinity College に寄贈した。⁵¹⁾ 前述の通り, Tc² はペーパーで6つの作品からなる写本である。

11. Samuel Pepys (1633-1703), secretary of the Admiralty

日記で有名な Pepy は Charles II の海軍省の高官であった。

彼は古英語の Ælfric of Eynsham の説教が書かれている2枚の fragments を所有している。⁵²⁾ これらは, Pepys の Calligraphical Collection vol. i の Specimen 16 であった。⁵³⁾ John Bagford が彼のコレクションのために助力したことは, よく知られているが, これも Bagford が彼のために調達したものである。⁵⁴⁾

Pepys が Chaucer のファンであったことは, 彼の日記からもわかる。⁵⁵⁾ *The Canterbury Tales* の他, 多くの作品を集めたペーパーの Cambridge, Magdalene College, MS. Pepys 2006 [Pp] だけでなく, Speght の1602年版や, Caxton の the second edition (c. 1484) も手に入れていた。

12. John Selden (1584-1654), jurist

彼は, 法律に関する豊かな学識によって議会で活躍した。Ben Jonson, William Camden, Robert Cotton などを知っていた。 *Analecton Anglo-Britannicon* と題した, ノルマン人による征服までのブリテン島の住民についての本を著した。蔵書家としても有名で, 修道院の記録や英国の歴史に関する資料を多く収めた彼の膨大なコレクションが火災にあったにもかかわらず, 写本を含む約8000冊が Bodleian Library に入った。⁵⁶⁾

Selden が持っていたと判明している2つの古英語の写本はどちらも法律についてのものである。⁵⁷⁾ 彼の所有した *The Canterbury Tales* の写本は, 美しい彩飾をほどこした光沢のある羊皮紙の Oxford, Bodleian Library, MS. Arch. Selden B. 14 (S. C. 3360) [Se] である。⁵⁸⁾

13. Isaac Vossius (1618-1689), canon of Windsor and scholar

Leyden に生まれ、語学に堪能であった彼は書誌学の深い知識によって、Royal Library のコレクションに大きな貢献をした。個人の蔵書も有名で、他の収集家から「分捕り品」だと言われた彼の写本は762にのぼる。⁵⁹⁾

古英語が書かれた写本は5冊所有していた。⁶⁰⁾

彼の持っていた *The Canterbury Tales* の写本は羊皮紙の Lincoln, Cathedral Library, MS. 110 (*olim* A. 4. 18) [Ln] であった。1646年 Vossius が、まだ Amsterdam に暮らしている時にこの写本を手に入れたのではないかと推測されている。彼は、いとこの Francis Junius と仲が良く、二人とも Chaucer に興味を持っていたようである。⁶¹⁾ Vossius は、*Truth* を含む Leiden, Bibliotheek de Rijksuniversiteit, MS. Vossius Germ. Gall. Q. 9 も所有していた。

(3) 18 世紀

1. Thomas Martin (1697-1771), of Palgrave, antiquary and lawyer

地誌学に興味のある酒豪の古書愛好家であった。The Society of Antiquaries の fellow であった。

彼は古英語の書かれた写本を2冊所有していた。⁶²⁾ そのひとつは fragment である。*The Canterbury Tales* の写本, Glasgow, University Library, MS. Hunter U. 1. 1. (197) (*olim* S. 4. 14; R. 8. 113) [Gl] の表紙にはりつけられている古い紙には 'Tho. Martin' の署名がある。それ以外に彼が所有していたことを示すものは現在のところ何もない。ペーパーで2段組になって書かれた写本である。短いラテン語の散文が終わりに書かれている。⁶³⁾

2. Richard Rawlinson (1690-1755), topographer and nonjuring bishop

ヨーロッパ各地を旅行し見聞を広めた。生前から Bodleian Library に寄付をよく行っていた彼は、遺言によって、自分の蔵書をそこにすべて寄贈した。⁶⁴⁾

Rawlinson は3冊の古英語が書かれている写本を所有していた。⁶⁵⁾

彼は *The Canterbury Tales* の写本を4冊も手に入れている。美しいもの、そうでないもの様々である。非常に豪華な装飾入りの羊皮紙の Oxford, Bodleian Library, MS. Rawlinson F. 223 (S. C. 14714) (*olim* Rawl. D intermediate list 1133) [Ra³], 厚い羊皮紙に書かれている MS. Rawlinson F. 141 (S. C. 14635) [Ra⁴], 質の悪い羊皮紙の MS. Rawlinson F. 149 (S. C. 14641) [Ra²], ほとんどがペーパーであり多くの詩を集めた MS. Rawlinson C. 86 (S. C. 11951) [Ra⁴] である。Ra¹ と Ra² は次に述べる兄の Thomas から、彼の死後1733/34年にその写本が売り出された時、買い取ったものである。⁶⁶⁾

3. Thomas Rawlinson (1681-1725), bibliophile

前述 Richard の兄である。国内法を勉強した。イングランドのみならず、ヨーロッパ大陸も旅行して回った彼は様々な書籍を収集したが、特に古く美しい古典作家の edition とイングランドの歴史に関係するものに深い関心を示した。Thomas Hearne にしばしば写本を貸して便宜を図っていたようである。⁶⁷⁾

Thomas Rawlinson の持っていた唯一の古英語の写本はグロス付のラテン語詩であった。これも、Chaucer の写本と同時に、弟 Richard に買い取られている。⁶⁸⁾

彼の所有した *The Canterbury Tales* の写本は、上述のとおり弟の Richard に渡った Oxford, Bodleian Library, MS. Rawlinson F. 141 (S. C. 14635) [Ra¹] と MS. Rawlinson F. 149 (S. C. 14641) [Ra²] の2つである。

4. Humfrey Wanley (1672-1726), antiquary

呉服屋に奉公に出ていた彼は、やがて Oxford で学び、本や写本を依頼主に調達する古書研究者となる。Fellow of the Society of Antiquaries にもなった。⁶⁹⁾

彼が持っていた古英語の写本は herbal (本草集) であった。⁷⁰⁾ Wanley はこれを Totnes の rector, Robert Burscough から入手し、その後 Harley に与えている。

Wanley の所有していた *The Canterbury Tales* の写本は *Troilus* を含む羊皮紙の London, British Library, MS. Harley 1239 [Ha¹] と、ペーパーで133もの詩を収めた MS. Harley 2251 [Hl²] であった。Ha¹ は Wanley が、写本収集家で Ashmolean Museum の keeper のひとりであった Dr. Richard Middleton Massy of Brasenose から買い取ったものである。⁷¹⁾ John Stow も所有していた Hl² は Wanley が 'Mr. Richard Jones many years ago (since deceased).' から購入した写本であった。⁷²⁾

以上のように、古英語を含む写本と *The Canterbury Tales* の写本の両方を所有した人々の大半は、羊皮紙の *The Canterbury Tales* の写本を持っていたことがわかる。そして、そのたくさんのものに彩飾がほどこされている。それに対して、たいていの場合、アンソロジーになっている紙の写本は、莫大な数の蔵書を持つコレクターや、文学・古典等に興味を持つ人々が所有することが多かったと思われる。⁷³⁾

16世紀の考察で扱った5つの写本のうち、3つが羊皮紙（その2つは彩飾入り）である。Archbishop Parker のように、広い分野に亘って、写本に興味を示した人物でも、紙の *The Canterbury Tales* の写本は、やがて手放している。17世紀では、20写本のうち、羊皮紙のものが12（うち7つは彩飾入り）、紙との混合が1つであった。18世紀になると、全部で、7写

本、そのうち羊皮紙製が3（うち1つが彩飾入り）、1つは大部分が羊皮紙の写本である。

17世紀に入ると、両方を持つコレクターの数が一気に増える。古事研究が巷に流行し、聖職者や貴族、地方の大地主だけでなく多くのロンドンの商人や法律家なども、歴史を伝える紋章学や骨董品に強い関心を示すようになり、⁷⁵⁾ 研究すると同時に、古いコインや書物を自分の手に入れようとした。

ところで、この頃になると、Chaucer の英語はますます当時の英語からかけ離れてゆき、「現代」英語版も出るほどになっていた。⁷⁶⁾ 1598年に初版が出て以来、John Urry の1721年版まで改版を重ね広く読み続けられた Thomas Speght 編の Chaucer 作品集のタイトルに、*The Workes of our Antient and Lerned English Poet, Geffrey Chavcer, newly Printed.* とあるように、それ以前の John Stow, William Thynne の edition の題名には見られなかった ‘ancient’ が添えられたこと、そして、Speght によって初めて約2000語の難解な語について glossary が設けられたことは、⁷⁷⁾ Chaucer の英語がもはや理解されなくなってきた事実を如実に示している。中英語の難しさについては Chaucer の英語だけに限ったことではなかつた。⁷⁸⁾

つまり、17世紀には、写本自体だけでなく作家 Chaucer とその言語も完全に骨董化してしまつたと言える。しかし、ここで心に留めておきたいのは、この時期、純粋な Anglo-Saxonists は、彼を ‘the great corrupter of our tongue’ とみなしたことも事実であるが、その一方、⁷⁹⁾ Chaucer をギリシア・ローマの古典作家と並び称した人々もいた、⁸⁰⁾ ということである。

したがって、古英語の写本と *The Canterbury Tales* の写本を同時に所有した人々は、その美的または骨董的価値のために収集したか、文学を愛する人であったか、あるいは、歴史研究的意義を、古英語の写本にはもちろんのこと、Chaucer の作品、特に、ノルマン人の征服後3世紀を経てはいるものの、昔のイングランドとそこに生きる人達が登場する *The Canterbury Tales* にも認めた人達であったのではないかと思われる。これを裏付けるのは、Alderson と Henderson の次の言葉である。⁸¹⁾

Chaucer’s works are also employed by the antiquaries to illustrate medieval customs and habits of mind. William Dugdale, for example, uses the *Parson’s Tale* to confirm his view that parti-colored garments were fashionable in Chaucer’s time and that the traditional form and color of the robes of sergeants at law date from this era. ... Anthony Hall interrupts a learned discussion of the origin and development of the office of esquire to quote Chaucer’s *General Prologue* portrait of the Squire ‘as a Relief to the Reader on so dry a Subject.’ The use of Chaucer’s poetry as historical

document is not wholly new in the later seventeenth century, since these antiquaries could look back to brief citations of this kind in Elias Ashmole, Sir Edward Coke, and William Camden. The ultimate origin of the practice might even be traced to Chaucer's appearance in the works of Tudor religious controversialists such as Foxe.

さらに、それを補強するのは、前述の The Elizabethan Society of Antiquarians の研究例会で、実際に、Chaucer の作品が、少なくとも 2 度、引用された記録が残っていることである。⁸²⁾

16世紀、文献によって、英国国教会を正当化するという、純粋な歴史研究の目的をかかげて始められた古英語の写本収集は、ナショナルリズムの波と中産階級の台頭によって、やがて、17世紀には、古事研究への関心を一気に、広い層に互らせた。その結果、社会階級にかかわらず、同じ興味を持つものが集まり、お互いに助け合って、研究、出版、書籍・写本などの売買や譲渡などを行った。当時 Chaucer はすでに古典作家となり、古事愛好家は、多くの場合、美しい羊皮紙の *The Canterbury Tales* の写本を手に入れたかった。というのは、先に述べたように、その物語のなかに、イングランドの歴史を読み取ろうとする者も少なくなかったため、この写本には骨董品としての価値以上のものがあると考えたからである。よく読まれていた Chaucer の *The Canterbury Tales* を収めた古い写本は、文芸愛好家にとって、この上ない貴重品であったことは言うまでもなからう。Chaucer の printed edition がまだ、人気を博し、その言葉は難解であったとは言え、glossary は付けても、本文をすっかり現代語訳してしまわなかったことにも当時の人々の古いものに対する興味がうかがわれる。⁸³⁾

こうして、この時代は、現代の私たちとは異なり、Chaucer を文学者としてのみ、とらえていたのではなく、彼の *The Canterbury Tales* は、古きイングランドの姿を後世に伝える役割を担った記録的文献として、当時、多くの古事愛好家の関心をひいたのである。

註

1) N. R. Ker, *Catalogue of Manuscripts Containing Anglo-Saxon* (Oxford 1957; reissued 1990) に挙げられている1540年以降の古英語写本の所有者および使用者の内、*The Dictionary of National Biography From the Earliest Times to 1900*, edd. Sir Leslie Stephen and Sir Sidney Lee (Oxford 1885-) [以下 DNB] に記載されている16世紀から18世紀に活躍したコレクター総数84名について、John M. Manly and Edith Rickert, *The Text of The Canterbury Tales Studied on the Basis of All Known Manuscripts*, vol. 1 (Chicago 1940) [以下 Manly-Rickert] に言及されている所有者をもとに、調査した。このうち、*The Canterbury Tales* の写本を持っていた者は27名であった。

- なお、16世紀、古英語で書かれた写本の所有者の約2割が *The Canterbury Tales* の写本を手に入れている。この数は次の17世紀には3割以上、18世紀には4割以上と増加している。
- 2) Willmer の手に渡る前に、この写本は、Wroxham Priory の refectorer を勤めていた修道士 (d. 1322) が所有し、おそらくは修道院の解体まで Norwich の Cathedral Priory にあったと考えられている。Hope Emily Allen, 'Wynkyn de Worde and a Second French Compilation from the 'Ancren Riwle' with a Description of the First (Trinity Coll. Camb. MS 883)', *Essays and Studies in Honor of Carleton Brown* (New York 1940), pp. 182-219 および W. H. Trethewey, ed., *The French Text of the Ancrene Riwle: Edited from Trinity College Cambridge MS. R. 14.7, with Variants from Bibliothèque Nationale MS. F Fr. 6276 and MS. Bodley 90., EETS, os 240* (1958) 参照。
 - 3) Ker no. 85 即ち Cambridge, Trinity College, MS. B. 14. 3 (289) [a single gloss to Arator] および Ker no. 90 即ち Cambridge, Trinity College, MS. R. 15. 32 (945) [names of the months in a calendar] である。これらは Willmer によって、Trinity College に寄贈された。
 - 4) Gavin Bone, 'Extant Manuscripts Printed from W. de Worde with Notes on the Owner, Roger Thorney', *The Library*, 4th ser. (1931/2), pp. 284-306 参照。
 - 5) Manly-Rickert, p. 534; B. Y. Fletcher, *MS Trinity [College, Cambridge] R. 3. 19* The Chaucer Facsimile Series 5 (Norman, Oklahoma 1987), pp. xv-xxxii.
 - 6) C. E. Wright, 'The Dispersal of the Libraries in the Sixteenth Century', *The English Library before 1700*, edd. Francis Wormald and C. E. Wright, pp. 208-237.
 - 7) 和田葉子「古英語・中英語写本の間にもみられるルネサンス期における所有者と使用法の相違について」『關西大學文學論集』第41巻第3号 (1992)。
 - 8) Ker, nos. 129, 171, 172, 193, 245, 247, 249, 256, 259, 265, 266, 269 and 270; Sears Jayne, *Library Catalogues of the English Renaissance* (2nd. ed., Godalming, Surrey 1983), p. 45.
 - 9) Manly-Rickert, p. 493.
 - 10) Ker no. 86, Cambridge, Trinity College, MS. B. 15. 34 (369). Paste-down に彼のサインが見られる。
 - 11) Ker nos. 49, 60, 84, 86, 87, 88, 89, 131, 144 and 325. これらのうち、Archbishop Parker から譲り受けていない可能性のあるものは、nos. 84, 89, 131, 144, 325 である。ちなみに no. 84 には、赤い鉛筆で彼のサインがあり、Archbishop Whitgift の手を経て Cambridge, Trinity College に入った。No. 89 も現在、同図書館に所蔵されている。No. 131 は Burghley に譲られ、John の赤いサインのある no. 144 は、1621年 Cotton が所有していたことがわかっている。同様の赤い鉛筆のサインのある No. 325 はやがて Lord Hatton の手に渡る。つまり、父 Matthew から受け取らなかったと思われる写本は Parker Library に収められなかったことになる。
 - 12) これを読んだ Skeat は、それを書き込んだ人物が a 'scrupulous and painstaking antiquary' だと p. xii に記している。[Manly-Rickert, p. 531.]
 - 13) Ker no. 61, Cambridge, Corpus Christi College, MS. 326 の flyleaf にも赤い鉛筆で 'TW' のイニシャルが書かれている。Ker はこれを、John Twine または Thomas Wotton のものだと考える。(p. 108.) なお、Twine (または Twyne) については Andrew G. Watson, 'John Twyne of Canterbury (d. 1581) as a Collector of Medieval Manuscripts: a Preliminary Investigation', *The Library*, 6th ser., vol. VIII, pp. 133-151 参照。
 - 14) Manly-Rickert, p. 531.
 - 15) Matthew Parker と Parker Library については *DNB*, vol. 15, pp. 254-264; Bruce Dickins,

- 'The Making of the Parker Library' (Sandars Lecture for 1968-9, 25 April 1969), *Transactions of the Cambridge Bibliographical Society* vol. vi (1972), pp.19-34; W. W. Greg, 'Books and Bookmen in the Correspondence of Archbishop Parker', *The Library* 4th ser. vol. xvi, pp. 243-279; May McKisack, *Medieval History in the Tudor Age* (Oxford 1971), pp. 26-49; C. E. Wright, 'The Dispersal of the Monastic Libraries and the Beginnings of Anglo-Saxon Studies. Matthew Parker and His Circle: A Preliminary Study', *Transactions of the Cambridge Bibliographical Society* vol. 1. part III (1951), pp. 208-237 参照。
- 16) Corpus Christi College, Cambridge, *Matthew Parker's Legacy*, 1975, the introduction by R. I. Page, p. 6.
- 17) Ker, nos. 21 and 220.
- 18) Manly-Rickert, p. 624.
- 19) Ker, no. 301.
- 20) *DNB*, vol. 17, p. 858.
- 21) Manly-Rickert, p. 642.
- 22) *DNB.*, vol. 18, pp. 736-741. Society of Antiquaries は, 1586年頃, Archbishop Parker の庇護のもとに The Elizabethan Society of Antiquaries が設立された。[May McKisack, *op. cit.*, pp. 155-169.]
- 23) Manly-Rickert, pp. 120-121.
- 24) *Ibid.*, p. 633. このカタログには, 最後のものを除いて, すべての作品に Sir Henry Spelman の自筆サインがある, という記述もされている。
- 25) *DNB.*, vol. 1, p. 868. なお, この見解に対して, 新たな見方が出てきている。Milton McC. Gatch, 'John Bagford as a collector and disseminator of manuscript fragments', *The Library*, 6th ser., 7 (1985), pp. 95-114 参照。
- 26) Ker, nos. 22, 242 and 243.
- 27) Manly-Rickert, p. 250.
- 28) McC. Gatch, *op. cit.*, p. 99.
- 29) Ker, no. 353.
- 30) *DNB*, vol. 8, p. 1289.
- 31) *The Canterbury Tales* の写本である London, British Library, MS. Harley 7335 は Edward second Earl に買い取られている (Manly-Rickert, p. 237)。おそらく, *The Canterbury Tales* を含む MS. Harley 7333, 7334 も同時に購入されたと考えられる。
- 32) Ker, nos. 331, 332 and 333.
- 33) *DNB.*, vol. 9, p. 164.
- 34) Manly-Rickert, p. 255.
- 35) Ker, nos. 134, 135 and 263.
- 36) *DNB.*, vol. 10, pp. 73-76.
- 37) Ker, nos. 135, 238 and 241.
- 38) *DNB.*, vol. 10, pp. 79-80.
- 39) Manly-Rickert, p. 475. ちなみに, 不当な方法で入手した写本に記された以前の所有者の名前は, 塗り潰したり, 削り取られるなどして判読できなくなる場合が多い。
- 40) Ker, nos. 341, 342, 343, 344, 345 and 346.
- 41) Manly-Rickert, p. 314.

- 42) *Ibid.*, p. 321. ちなみに, Laud は, 羊皮紙で彩飾入りの Gower の *Confessio Amantis* の写本も所有していた。この Oxford, Bodleian Library, MS. Laud 609. F. 1 には ‘Liber Guilielmi Laud Archiepiscopi Cantuar. et Cancellarii Vniuersitatis Oxon. 1633’ と記されている。[G. C. Maccaulay, ed., *The English Works of John Gower* 2 vols. EETS extra ser. lxxxii (Oxford 1900), vol. 1, p. cxlix.] Ld² の f. 1 の記述に一致するので, 同時に入手したものと考えられる。
- 43) Ker, no. 133.
- 44) その唯一の論拠となっているのは, 1688年10月30日付けの Maitland の sales catalogue である。ここに英語の写本の一番目として, あげられているのが ‘The Works of Sir Geoffrey Chaucer, curously writ upon Vellum and gilded very ancient.’ であるが, これが, Ra³ であるという確証はまったくない。(Manly-Rickert, pp. 625-626.)
- 45) Manly-Rickert, p. 471.
- 46) *DNB.*, vol. 13, pp. 806-808; McC. Gatch, *op. cit.*, pp. 98, 102 and 105.
- 47) Ker, nos. 25, 26 and 27. このうち no. 25 は Moore が Alexander Cunningham から買い取ったことがわかっている。(Ker, *op. cit.*, pp. 38-39.)
- 48) これら3つの写本には, c. 1753 の Parris Catalogue の中で Moore の蔵書であったことを示す R. の分類記号が付されている。Dd は1705年 Norwich で亡くなった Hackney の校長をしていた Samuel Hoadly から手に入れたのではないかと推測されている。(Manly-Rickert, p. 197.) さらに, Ee と Mm に関しては, E. Bernard, *Catalogi Manuscriptorum Angliae et Hiiberniae* (Oxford, 1697) に Moore の蔵書であったという記載がある。(Manly-Rickert, pp. 129 and 370.) Mm は Sir John Weld (d. 1674) が所有していたが, 彼から直接 Moore に渡ったのかどうかについては定かではない。(Manly-Rickert, p. 370.)
- 49) Ker, nos. 83, 88 and 91.
- 50) Ker, *op. cit.*, p. 134.
- 51) Manly-Rickert, p. 531.
- 52) Ker, no. 243.
- 53) Ker, *op. cit.*, p. 315.
- 54) 興味深いのは, 同じ元の写本の装丁に使われていた fragment, The British Library, MS Harley 5915, fol. 13 を, Bagford 自身が所有していたことである。つまり, Bagford は出版を計画していた印刷の歴史の本の見本にするためのコレクション用に1枚保存した後は, その残りの部分を古書に興味ある仲間や, 写本収集を依頼されている顧客に分けていたと考えられる。(McC. Gatch, *op. cit.*, pp. 105 and 109.)
- 55) 1663年から1664年にかけて, Chaucer への賛辞 ‘without doubt... a very fine poet’ や, Pepys が *Troilus and Criseyde* を愛読していたこと, 所有していた Speght の edition を製本に出したことなどが書かれている。(C. F. E. Spurgeon, *Five Hundred Years of Chaucer Criticism and Allusion*, 3 vols., Cambridge, 1925, pp. 241-242; Derek Brewer, *Chaucer. The Critical Heritage*, vol. 1, London 1978, pp. 153-155.)
- 56) *DNB.*, vol. 17, pp. 1150-1162.
- 57) Ker, nos. 225 and 226. No. 225 は Selden が Sir Simonds D’Ewes (1602-1650) に贈った記録が残っている。No. 226 もこの2人が所有者であったことから, おそらく no. 225 と共に D’Ewes に渡ったのではないかと推測される。D’Ewes はこの他4つの古英語写本を有する, 熱心なコレクターであった。彼の所有していた写本のリスト, Harley MS. 775 には, 彼自身が筆写した個人や修道院の古い記録, 遺書などが含まれ, 英国の古文書や法律の歴史を研究する重要な文献を提供してくれる。

Francis Junius と Anglo-Saxon Dictionary も編纂したが、出版はされなかった。彼はまた、Selden を冷笑したり、Camden のあら捜しをしたとも伝えられている。(DNB., vol. 5, pp. 900-903.) ちなみに、no. 226 は Lambarde が *Archaionomia* (1568) のために使用した写本のひとつである。(Ker, *op. cit.*, pp. 302-303.)

- 58) Manly-Rickert, pp. 498-499.
 59) DNB., vol. 20, pp. 392-396.
 60) Ker, nos. 335, 336, app. 17, 18 and 19.
 61) Isaac Vossius は1670年にイングランドに来た。Manly-Rickert, p. 336.
 62) Ker, nos. 272 and 322.
 63) Manly-Rickert, pp. 183-188.
 64) DNB., vol. 16, pp. 774-777.
 65) Ker, nos. 348, 349, 350 and 351. なお、Ker, *Catalogue* の p. 566 の記述は誤っている。
 66) Manly-Rickert, pp. 454 and 460.
 67) DNB., vol. 16, pp. 777-778.
 68) Ker, no. 350.
 69) DNB., vol. 20, pp. 744-746. 重要な資料となっている Wanley の日記・書簡については C. E. Wright and Ruth C. Wright (edd.), *The Diary of Humfrey Wanley 1715-1726* (London, 1966) 及び P. L. Heyworth (ed.), *Letters of Humfrey Wanley Palaeographer, Anglo-Saxonist, Librarian 1672-1726* (Oxford 1989) 参照。
 70) Ker, no. 231.
 71) Manly-Rickert, p. 197.
 72) *Ibid.*, p. 244.
 73) *The Canterbury Tales* を含む写本全体について言えることは、ペーパーの写本は様々な作家の作品集、それに対して、vellum のものは収められている作品が、*The Canterbury Tales* だけに限られるか、あるいは、それに1, 2の短い作品が添えられるだけの場合がほとんどである。
 74) 本論中にあげられている人々に加えて、すでに16世紀 Anglo-Saxonist であって、しかも Chaucer の熱烈なファンであった典型的な人物、John Leland (1506-1552) について少し触れておきたい。彼が Chaucer の写本を所有していたことは知られていないが、古英語の写本を持っており (Ker, no. 171), その多くを利用し (Ker, nos. 88, 191, 217 and 295), 修道院解体後、写本の散逸を防ぐため重要な役割を果たした。Leland は、しばしば、ラテン語で詩作をした。というのは、彼は英語よりラテン語のほうが優れていると信じて疑わなかったからである。そんな Leland でさえ、Chaucer をイギリスの代表的作家と認め、彼が史上、初めて残した Chaucer 伝の中で彼を賞賛してやまない。[Eleanor Prescott Hammond, *Chaucer. A Bibliographical Manual* (New York 1933), pp. 1-7. Leland については、DNB, vol. 11, pp. 892-896; T. D. Kendrick, *British Antiquity* (London 1950), pp. 45-64; McKisack, *op. cit.* pp. 1-25 参照。]
 75) The Elizabethan Society of Antiquaries のメンバーには、散逸した古英語写本の救済と古事研究に貢献したケントの治安判事で歴史家でもあった William Lambarde (1536-1601), 宮廷のロッキ長で1532年 Chaucer の作品集を出版した William Thynne (d. 1546), ロンドンの仕立屋で、やはり、Chaucer の作品集を出し、多くのロンドンやイングランドの歴史の本を著した地誌学者 John Stow (1525?-1605), 蔵書家の Sir Robert Cotton (1571-1631), 古美術研究者であり歴史家でもある William Camden (1551-1623) などがいた。(May McKisack, *op. cit.*, pp. 155-169.)
 76) 1630年頃には *Troilus and Criseyde* の最初の3巻の17世紀版現代英語訳が出版された。(Hammond,

op. cit., pp. 149-151.) そのタイトルは次のようであった。

A
Paraphrase
upon
The three first Bookes of
CHAUCERS
TROIUS and CRESSIDA.
Translated into our Moderne English.
For the satisfaction of those.
Who either cannot, or will not, take y^e paines to vnderstand.
The Excellent Authors.
Farr more Exquisite, and significant Expressions
Though now growen obsolete, and
out of vse.
By
J: S:

Semel Insaniuimus omnes.
Quas habeat Meretrix, Merie-tricks, ediscere Nolj
Namque mere trux est, cum meretrice jocus.

(*Ibid.*, p. 150.)

また、T. R. Lounsbury はその著書 *Studies in Chaucer* (New York 1892) 3 vols., III, p. 154 の footnote で、彼は booksellers' catalogues の中に 'a book purporting to have been published in 1641, which is entitled Canterbury Tales, translated out of Chaucer's Old English into our usual Language' とあったのを目にしたことがあると述べているが、実物は見たことがないし、それ以上のことは何もわからないと言う。(Hammond, *op. cit.*, p. 221.)

ちなみに、すでに、1546年、Peter Ashton は 'Chaucer's words out of use' と書いている。(Brewer, *op. cit.*, pp. 101-102.)

77) Derek Pearsall, 'Thomas Speght (ca. 1550-?)', *Editing Chaucer*, ed. by Paul G. Ruggiers (Norman, Oklahoma 1984), p. 81.

78) William L. Anderson and Arnold C. Henderson, *Chaucer and Augustan Scholarship*, University of California Publications, English Studies 35, (Berkeley and London 1970), pp. 26-32.

79) *Ibid.*, p. 4.

80) John Dryden (1631-1700) は、本論でも言及した Pepys との書簡をはじめ、いたる所で Chaucer を褒め称えているが、最も有名なのは、彼が *Fables Ancient and Modern, Translated into Verse from Homer, Ovid, Boccace & Chaucer: With Original Poems* (1700) につけた Preface である。彼は、ここで Chaucer を Virgil と同格の詩人だと断言している。(Spurgeon, *op. cit.*, pp. 269-285; Brewer, *op. cit.*, pp. 160-172.)

ところで Thynne が Chaucer の作品を編纂した際の、この詩人に対する扱いを、Blodgett は次のようにまとめている。

... Thynne was prepared to accord to the works of Chaucer the same respectful treatment that humanist scholars had been according to classical Greek and Latin writings since the

fourteenth century, when Petrarch established the practice of collecting and collating as many manuscripts of classical works as possible. . . . Such scholarly approaches to vernacular literature were still unusual. . . .

[James E. Blodgett, 'William Thynne (d. 1546)', *Editing Chaucer*, p. 36.]

81) *Ibid.*, p. 25.

82) McKisack, *op. cit.*, p. 164. なお The Elizabethan Society of Antiquaries のメンバーであった William Lambarde [注 75) 参照] が *Dictionarium Angliae Topographicum & Historicum* の中で、次のように Chaucer の墓について触れていることを、付け加えておきたい。

In the South Part of this Church [Westminster Abbey] lyeth *Geffrey Chaucer*, whose Tombe was re-edified in my Memorie by Mr *Brigham*, and of whome *Leland* some tyme maked this Epitaphe

Praedicat algerum merita florentia Dantem

.

Cui veneres debet patria lingua suas

. . . And lastly, not farre from *Chaucer* lyeth *Robert Halle*, slayne by the Lord *Latymer*, as he kneled at Masse, upon a Strife growen betwene them in *Franunce*, fro the takinge of a Prisonner: Thus much of the Buryed.

(Spurgeon, *op. cit.*, p. 126.)

83) ' . . . they [Chaucer's editors] did not wish to engage in any wholesale programme of modernisation since they knew that for many readers the antiquity of the language was actually a source of attraction. These readers might be the very ones who would buy their books. For this reason, too, they continued to print Chaucer in Caxton's black-letter or Gothic type, even though it was completely obsolete. . . . ' [Derek Pearsall, *The Canterbury Tales*, Unwin Critical Library, gen. ed. Claude Rawson (London 1985), p. 307.]